

東洋の思想と宗教 第三十五號 平成三十年（二〇一八）三月 抜刷

『人天眼目』に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉

サンヴェイド・マルタ

# 『人天眼目』に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉

## サンヴェイド・マルタ

### 一 はじめに

中世曹洞宗は、道元禪師以降、中國思想あるいは密教を始めたとして他の宗の影響を受け、現在一般に知られている「禪」あるいは「曹洞宗」と異なるイメージを顯したことは周知となっている。それについて、石川力山は、次のように言う。

日本の中世曹洞宗における地位的展開を考える上で、總持寺を中心に僧團を結束させた峨山韶碩の存在は、極めて大きな意味をもっていると思われるが、それは單に教團史的な意味にとどまらず、思想的にも重要であることを含む。すなわち、中世曹洞宗の參禪修行の實態は公案話頭を拈ずる看話の禪にあったが、一方思想的特徴とし

て五位説による宗旨理解が一般的であった。<sup>(1)</sup>

しかしながら、禪史上には、臨濟宗と曹洞宗が區別され、所謂「臨濟將軍・曹洞土民」となっているが、修行の面でも、同様に「曹洞宗・只管打坐」で、「臨濟宗・看話禪」のように分けられている。しかし、玉村氏の指摘の如く、その視點には様々な問題が含まれている。つまり、兩宗派の展開は多元的であり、兩宗の間に大いに交流があったと確認できるのである。とはいえ、中世曹洞宗の參禪修行の實態は公案話頭を拈ずる看話の禪にあった。日本中世曹洞禪宗において公案禪の流行を背景とし、曹洞五位説の傳授が諸々の門派に浸透したのであり、それは中世曹洞宗の相傳資料には非常に大事な位置付けを持った思想であった。五位説傳授においては、

〔人天眼目〕に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉（サンヴェイド）

特に基礎文獻である『人天眼目』が擧げられ、それは曹洞宗と臨濟宗の間でよく論じられた書物であつた。先行研究では、『人天眼目』は曹洞宗門派への影響が強調されたが、曹洞宗と臨濟宗の交流あるいは五位説の普及という視點からは、未だ考察されていない。そこで、本論文では、現在まで十分に注目されていない『人天眼目』とそれに關わる抄物における臨濟宗と曹洞宗の相互交渉について考察を行いたい。

加えて、臨濟宗と曹洞宗の異なっている『人天眼目』への視點が、どの程度まで五位説傳授に影響を與えたのかという疑問に、依然として明確な答えは出されていないように思われる。その問題は、曹洞宗と臨濟宗の相互交渉にとどまらないが、中世曹洞宗の展開と抄物の役割という切實な疑問にも繋がっている。また、中世曹洞宗の五位説は非常に限られた教團の間に傳授されたものではなく、むしろ當時の資料によれば、五位説の傳授には様々な種類があり、當時の五位説の研究の基盤となつたのは、『人天眼目』の抄物である『人天眼目抄』と言えよう。また、『人天眼目抄』に大きな影響を與えた資料は、臨濟宗の間に成立した『人天眼目批郢集』であつたと推定できる。そして、五位説の基盤となつた『人天眼目』とその抄物は中世時代の臨濟宗と曹洞宗の共通知識で

あつたため、臨濟宗と曹洞宗の交渉あるいは兩派の「智の循環」が『人天眼目』の諸々の抄物に見られることとなる。

## 二 中國五位説に關わる諸問題

中世曹洞宗における五位思想の修學において、『人天眼目』は基礎的な書物となつたので、先ず中國禪宗の五位説始原について考えたい。

偏正五位説とは、中國曹洞宗の開祖である洞山良价（八〇七―八六九）の代表的な指導手段（機關）を指している。日本中世曹洞禪宗においては、公案禪の流行を背景に、五位説傳授が諸々の門派に浸透したと言つてよい。

一般的には、偏正五位が洞山禪師によつて創造されたものであることが指摘されている。洞山禪師の法を受けた曹山本寂が、更に五位説を取り上げて新たな解釋を成立させたことも周知である。偏正五位説の性格や内容について、時代の變遷に従い、様々な解釋が行われたため、統一的な曹洞宗旨として認識し難く、むしろ複雑な性格を持つていふと言つてよい。元來、偏正五位説は學人を大悟徹底に導くための手段として施設されたのである。偏正五位説は曹洞教團にとどまらず、臨濟門においても禪宗の指導方法（禪機）として用いら

れたが、それは洞山・曹山の説いた五位とは異なり、五箇の項目として組織的に整理されたことは明らかである。そのため、門派あるいは祖師により、五位説の捉え方や用いられ方が大きく異なり、その展開が一義的には把握し難いと思われる。

偏正五位説の原典となるのは、洞山禪師の『五位顯訣』であるが、中國においてそれは早くに散失してしまい、洞山の弟子であった曹山本寂の『遂位頌』がそれぞれの門派に浸透した。

洞山禪師が説いた五位についての大事な資料としては『重編曹洞五位』が挙げられる。『重編曹洞五位』は五位參究に多大な影響を及ぼし、傳統的な五位原形としては最も傳承されたものであると言つてよい。そのため、五位參究の標準となつたことは間違いない。そこで、『重編曹洞五位』巻上を參考にしながら、洞山禪師の説いた五位について考察したい。『重編曹洞五位』の洞山禪師五位説は次の如くである。

今此亦云「洞山顯訣」則五位之設始自「洞山」。是天下之通論也。〔中略〕

正位却偏<sub>レ</sub>就偏辨得。是圓<sub>二</sub>兩意<sub>一</sub>。曹山揀云、正位却偏者、爲<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>物、雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>物却具。輝釋云、却具者、具用也。

〔「天眼目」に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉（サンヴァイド）

別時揀云、正中無<sub>レ</sub>用爲<sub>レ</sub>偏、全<sub>レ</sub>用爲<sub>レ</sub>圓。是兩意。〔中略〕偏位雖<sub>レ</sub>偏、亦圓<sub>二</sub>兩意<sub>一</sub>。緣中辨得。是有語中無語。揀云、爲<sub>二</sub>用處不<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>的。不<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>的則眞。不<sub>二</sub>常用<sub>一</sub>也。〔中略〕又揀云、偏位雖<sub>レ</sub>偏亦圓者。用中無<sub>レ</sub>物不<sub>レ</sub>觸是兩意。雖<sub>下</sub>就<sub>上</sub>用中<sub>一</sub>明<sub>上</sub>、爲<sub>二</sub>語中不<sub>レ</sub>傷<sub>一</sub>。此乃竟日道如<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>道。一般又云、偏位却圓、亦具<sub>二</sub>緣中<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>觸。〔中略〕

或有<sub>二</sub>正位中來者<sub>一</sub>。是無語中有語。揀云、正中來者不<sub>レ</sub>兼<sub>レ</sub>緣。

或有<sub>二</sub>偏位中來者<sub>一</sub>。是有語中無語。揀云、偏位中來者則兼<sub>レ</sub>緣。

〔中略〕

或有<sub>二</sub>相兼帶來者<sub>一</sub>、這裡不<sub>レ</sub>說<sub>二</sub>有語無語<sub>一</sub>語。這裡直須<sub>二</sub>正面而去<sub>一</sub>。這裡不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>圓轉<sub>一</sub>。事須<sub>二</sub>圓轉<sub>一</sub>。揀云、相兼帶來者、爲<sub>二</sub>語勢不<sub>レ</sub>偏不<sub>レ</sub>正。不<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>無。如<sub>レ</sub>全<sub>レ</sub>不全。似<sub>レ</sub>虧不<sub>レ</sub>虧。唯得<sub>二</sub>正面而去<sub>一</sub>也。<sup>(3)</sup>

まず、「偏正五位」とは洞山大師のものであると明確に指摘されている。洞山禪師の創唱した五位説のそれぞれの名稱は、法嗣の曹山禪師により改められ、『重編曹洞五位』の洞山禪師五位説の名稱とは大きく異なる。『重編曹洞五位』の「洞山五位顯訣」には、各位に曹山禪師の揀擇が次ぐので、偏正

五位説の構造あるいはその解釋に曹山禪師の貢獻が不可缺であつたと理解できる。「洞山五位顯訣」の洞山五位は「正位却偏」・「偏位却正」・「正位中來」・「偏位中來」・「相兼帶來」となつてゐる。しかし、洞山所説の五位と曹山所説は名稱的な面だけで區別すれば、様々な問題が展開するのである。第一に、内容的に五位説というものは、洞山と曹山により同等に創唱されたかどうかを問う必要が生まれる。五位説において、最も古い資料としては『宋高僧傳』第一三卷が擧げられ、「曹山傳」には、五位説の起源は次のように説かれてゐる。

後被<sub>レ</sub>請住<sub>ニ</sub>臨川曹山<sub>一</sub>。參問之者、堂盈室滿。其所<sub>ニ</sub>酬對<sub>一</sub>、邀射匪<sub>レ</sub>停。特爲<sub>ニ</sub>蠹客標準<sub>一</sub>。故排<sub>ニ</sub>五位<sub>一</sub>、以銓量<sub>ニ</sub>區域<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>不盡<sub>ニ</sub>其分齊<sub>一</sub>也。復注對<sub>ニ</sub>寒山子詩<sub>一</sub>、流行<sub>ニ</sub>寓內<sub>一</sub>。蓋以下<sub>レ</sub>寂素修<sub>ニ</sub>舉業<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>優<sub>上</sub>也。文辭適麗號<sub>レ</sub>富有<sub>ニ</sub>法才<sub>一</sub>焉。<sup>(4)</sup>

要するに、五位説については洞山の名が記されることなく、曹山の創唱したものであることが明記されている。そのため、五位説とは、洞山禪師と曹山禪師の原型そのものではなく、寧ろ後人の手が加えられたものであり、根源は如何なるものであるか言い難いものである。

前の如く、曹山は洞山五位説の名稱を改變し、それが日本

曹洞宗においても定着した。

一般に普及した五位説については、天理大學圖書館所藏の『人天眼目』（乾元元年・西曆一三〇三年）では、次のようになる。

悟本五位頌

正<sub>一</sub>中<sub>一</sub>偏、三<sub>一</sub>更<sub>一</sub>初<sub>一</sub>夜<sub>一</sub>月<sub>一</sub>明、前<sub>一</sub>莫<sub>一</sub>相<sub>一</sub>逢<sub>一</sub>不<sub>一</sub>相<sub>一</sub>識<sub>一</sub>、  
隱<sub>一</sub>隱<sub>一</sub>猶<sub>一</sub>懷<sub>一</sub>昔<sub>一</sub>日<sub>一</sub>嫌<sub>一</sub>ヲ。

偏<sub>一</sub>中<sub>一</sub>正、失<sub>一</sub>曉<sub>一</sub>老<sub>一</sub>婆<sub>一</sub>逢<sub>一</sub>古<sub>一</sub>鏡、分<sub>一</sub>明<sub>一</sub>觀<sub>一</sub>面<sub>一</sub>更<sub>一</sub>無<sub>一</sub>他。  
休<sub>一</sub>更<sub>一</sub>迷<sub>一</sub>頭<sub>一</sub>猶<sub>一</sub>認<sub>一</sub>影<sub>一</sub>ヲ。

正<sub>一</sub>中<sub>一</sub>來、無<sub>一</sub>中<sub>一</sub>有<sub>一</sub>路<sub>一</sub>出<sub>一</sub>塵<sub>一</sub>埃<sub>一</sub>ヲ。但能<sub>一</sub>不<sub>一</sub>觸<sub>一</sub>當<sub>一</sub>今<sub>一</sub>諱<sub>一</sub>也。勝<sub>一</sub>前<sub>一</sub>朝<sub>一</sub>斷<sub>一</sub>舌<sub>一</sub>才<sub>一</sub>。

偏<sub>一</sub>中<sub>一</sub>至、兩<sub>一</sub>刃<sub>一</sub>交<sub>一</sub>鋒<sub>一</sub>要<sub>一</sub>ス迴<sub>一</sub>避<sub>一</sub>好<sub>一</sub>手<sub>一</sub>還<sub>一</sub>同<sub>一</sub>シ  
火<sub>一</sub>裏<sub>一</sub>蓮<sub>一</sub>宛<sub>一</sub>然<sub>一</sub>自有<sub>一</sub>冲<sub>一</sub>天氣<sub>一</sub>。

兼<sub>一</sub>中<sub>一</sub>到、不<sub>一</sub>落<sub>一</sub>有<sub>一</sub>無<sub>一</sub>誰<sub>一</sub>敢<sub>一</sub>和<sub>一</sub>セン。人<sub>一</sub>人<sub>一</sub>盡<sub>一</sub>欲<sub>一</sub>出<sub>一</sub>常<sub>一</sub>流<sub>一</sub>折<sub>一</sub>合<sub>一</sub>終<sub>一</sub>歸<sub>一</sub>炭<sub>一</sub>裏<sub>一</sub>坐<sub>一</sub>焉。<sup>(6)</sup>

『曹洞五位顯訣』の「先曹山本寂禪師逐位頌并註別揀」には、五位説と共に、曹山の揀擇が付けられている。

逐位頌

正<sub>一</sub>中<sub>一</sub>偏、三<sub>一</sub>更<sub>一</sub>初<sub>一</sub>夜<sub>一</sub>月<sub>一</sub>明前、揀<sub>一</sub>云<sub>一</sub>里<sub>一</sub>白<sub>一</sub>未<sub>一</sub>交<sub>一</sub>時<sub>一</sub>辨<sub>一</sub>取<sub>一</sub>。又<sub>一</sub>云<sub>一</sub>、  
萌芽<sub>一</sub>未<sub>一</sub>生<sub>一</sub>之<sub>一</sub>時<sub>一</sub>。又<sub>一</sub>云<sub>一</sub>、只<sub>一</sub>今<sub>一</sub>是<sub>一</sub>什<sub>一</sub>麼<sub>一</sub>時<sub>一</sub>。又<sub>一</sub>云<sub>一</sub>、此<sub>一</sub>中<sub>一</sub>無<sub>一</sub>日<sub>一</sub>  
月<sub>一</sub>不<sub>一</sub>下<sub>一</sub>説<sub>一</sub>前後<sub>一</sub>去<sub>一</sub>也。莫<sub>一</sub>惟<sub>一</sub>相<sub>一</sub>逢<sub>一</sub>不<sub>一</sub>相<sub>一</sub>記<sub>一</sub>。揀<sub>一</sub>云<sub>一</sub>忘<sub>一</sub>却<sub>一</sub>也。

又云、就也。又、作麼劫中違背來。恁麼則俱拱<sub>レ</sub>手去也。隱隱猶懷<sub>レ</sub>舊時妍。揀云、此兩句一意終不相似。又云、圓也。又、今日重<sub>レ</sub>什麼。又恁麼則不自欺得。

偏中正 揀云、緣中會也。失曉老婆逢<sub>レ</sub>古鏡。揀云、露也。又、適來又記得。又、是什麼模樣。又云、恁麼則別不<sub>レ</sub>呈色。分明觀面別無<sub>レ</sub>真。揀云、即今會也。又云、只者個便是也。又云、失。又、恁麼則未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>真時較<sub>レ</sub>些子。爭奈迷<sub>レ</sub>頭還認<sub>レ</sub>影。揀云、不是本來頭。又、莫<sub>レ</sub>認<sub>レ</sub>影即是。又、終不<sub>レ</sub>記得。又、恁麼則改不<sub>レ</sub>得也。

正中來 揀云、過也。無中有<sub>レ</sub>路隔<sub>レ</sub>塵埃。揀云、無句中<sub>レ</sub>有句。又云、相隨來也。又、從來事作麼生。又、恁麼則不<sub>レ</sub>相借<sub>レ</sub>也。但能不<sub>レ</sub>觸<sub>レ</sub>當今諱。揀云、傍<sub>レ</sub>這個。又云、早是傍也。又云、自是一般人。又云、恁麼則盡大地無<sub>レ</sub>第二人<sub>レ</sub>也。也勝<sub>レ</sub>前朝斷舌才。揀云、非<sub>レ</sub>默。又云、更切<sub>レ</sub>於這箇。又、終不<sub>レ</sub>切<sub>レ</sub>齒。又云、恁麼則叮嚀不<sub>レ</sub>得者。

〔略〕

偏中至 揀云、有句中來。兩刃交<sub>レ</sub>鋒不<sub>レ</sub>相避。揀云、主客不<sub>レ</sub>相觸。又云、彼彼不<sub>レ</sub>傷也。箭箭相柱脉脉不<sub>レ</sub>斷。又云、不<sub>レ</sub>相敵<sub>レ</sub>者。又、恁麼則却不<sub>レ</sub>相管。好手還同<sub>レ</sub>火裡蓮。揀云、壞不<sub>レ</sub>得。又云、誰是得<sub>レ</sub>便者。又云、弱

〔人天眼目〕に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉（サンヴィド）

於阿誰。又、恁麼則終不<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>第二人<sub>レ</sub>也。宛然自有<sub>レ</sub>冲天意。揀云、不<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>人得。又、恁麼則不<sub>レ</sub>借也。又云、非<sub>レ</sub>本有。又、恁麼則已亦不<sub>レ</sub>存。又云、非<sub>レ</sub>己有。

兼中到 揀云、妙挾。不<sub>レ</sub>落<sub>レ</sub>有無<sub>レ</sub>誰敢和。揀云、不當頭。又云、他是作家。又云、正好商量。喚<sub>レ</sub>什麼作<sub>レ</sub>商量。道將來云問。人人盡欲<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>時流。揀云、皆欲<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>類。又云、有什麼出頭處。又動則死。又恁麼則隨<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>快活也。折合還來<sub>レ</sub>炭裡<sub>レ</sub>坐。揀云、即可<sub>レ</sub>知也。將知合作麼生。又云、謾<sub>レ</sub>他不<sub>レ</sub>得。又、恁麼則賴得<sub>レ</sub>是某甲。

曹洞五位は三つのグループに區別され、理解されている。第一に、「正中偏」・「偏中正」という回互があり、すなわち正と偏が互に入り交って關係し、相依相存の形でありながら、それぞれ獨自の意義を失わないことで、それは佛即衆生・衆生即佛に當たることもある。次の二位「正中來」・「偏中至」は、不<sub>レ</sub>回互という。それは、「正中來」は「正」を究極し、「偏中至」は「偏」を究極している獨立的な關係を指示している。

第五位「兼中到」とは、簡潔に言えば、對照的な回互と不<sub>レ</sub>回互が調和する一位である。「五位顯訣」では第五位は「相兼帶來」と稱されるが、それは「兼帶」とも省略され、偏正五位では意義として重視されている。「兼帶」は前四位の展開

始點となるので、その根本であると理解できる。兼帶思想は曹山系の者の間で主流であつた意義であると推測されているので、必ずしも洞山のみ概念とは言えず、曹山自體の解釋の影響も及んだと考えられる。

### 三 偏正五位説における變遷

時代の流れに沿つて、偏正五位説の解釋が増え、偏正五位の理解は大いに變化したのである。その變化に大きな影響を與えたのは功勳五位であろう。功勳五位とは曹洞五位の一部であり、洞山禪師の創唱したものととして知られている。功勳五位は偏正五位と違い、學人修行の階段的過程を表わしたものである。しかし、功勳五位は偏正五位と對立的な關係ではなく、むしろ兩方が洞門教學の兩面を示すものであるので、密接に結び付いている。従來、様々な解釋の影響で、偏正五位と功勳五位の區別が薄くなつた結果、偏正五位が階梯的な教義として理解されたことが一般的となつた。

『人天眼目』では、功勳五位は次のように示されている。

「洞山功勳五位頌」

向 奉 功 共功 功功

僧問、如何是向。師ノ曰、喫飯時作麼生。

〔略〕

僧問、如何是奉。師ノ云、背ノ時作麼生。

〔略〕

僧問、如何是功。師云、放下鋤頭時作麼生。

〔略〕

僧問、如何是共功。師云、不得色。

〔略〕

僧問、如何是功功。師云、不共。

〔中略〕

聖主來法セイノツトルニ 二帝堯テイケウ 御レ人以レ禮キヨスルニ 曲レ 龍腰ニ 一有時闍市

頭邊過ク。到處文明ニ 賀ニ 聖朝ヲ 一

淨セイ 二洗ス 濃粧サツラ 一爲ニ 阿難カ 一子規ノ聲ノ裏勸メテ 人ヲ 婦ヲ 百

花落盡キ 啼キ 無シ 盡ス 一更ニ 向テ 二亂峰深處ニ 一啼ク 奉

枯木花開ク 劫外ノ春。倒騎テ 玉象ニ 一趣ニ 麒麟ヲ 一而今高ク

隱ル 千峯ノ外ニ 月皎風清シ 好日辰。

衆生諸佛不ニ 相侵サ 一山ハ 自高兮水自深シ。萬別千差明ム

底事ヲ 一。鷓胡鳴處ニ 百花新ナリ。

頭角纒生レハ 已テ 不堪、擬メ 心ヲ 求ム 佛好羞慚セン。迢迢タル

空劫無シ 二人ノ識ル 一背テ 向テ 南ニ 詢ヤ 二五十三ヲ 一 功功ニ

『人天眼目』によれば、功勳五位とは、向・奉・功・共功・

功功となつてゐるが、功勳五位は君臣五位に結びついている。君臣五位とはほぼ同じ働きを示している機關と言えよう。

五位君臣

僧問「曹山ニ五位君臣ノ旨訣ヲ。山曰正位ハ即屬スニ空界ニ本  
來無物偏位ハ即色界ナリ有ニ萬形像偏中至者ハ捨テ事入ル  
理ニ。正中來者ハ背テ埋就クレ事兼帶者ハ冥應ニ衆緣ニ。不  
レ隨セニ諸有ニ、非スレ染ニ非淨、非正ニ非偏。故ニ曰フ虛  
玄ノ大道無著眞宗。從上ノ先德、推ニ此一位ヲ最妙最  
玄ナリ。要ス當ニ審詳辨明スマ君ヲ爲スニ正位ト。臣ヲ爲スニ偏位ト。  
臣向レ君ニ是偏中正ナリ。君視レ臣ニ是正中偏ナリ。君臣道ヲ合ウ。  
是兼帶語ナリ。問、如何是君。曰、妙一德尊クニ寰宇ニ、高  
明一朗リニ太虛ニ。如何是臣。曰、靈機宏ニ聖道。眞一智  
利ニ群一生ヲ。問、如何是臣向レ君。曰、不レ墮ニ諸ノ異趣ニ、  
凝シテ情ヲ望ムニ聖一容ヲ。問、如何是君視レ臣。曰、妙一容  
雖レ不レ光、燭不スレ無キ偏。問、如何是君臣道合。曰、  
混然無シニ内外。和融シテ上下平ナリ。又曰、以ニ君臣偏正ヲ  
言者、不サルレ欲レ犯レ中。」<sup>(10)</sup>

君臣五位というのは、洞山禪師の法嗣である、曹山本寂が  
偏正五位の理論を借りて、君臣の理念に基づいた宗旨を指し  
ている。『人天眼目』には、曹洞門庭の「偏正五位・四賓主・

『人天眼目』に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉（サンヴィド）

功勳五位・君臣五位・王子五位」が全て、曹洞宗風隨機利物  
として示されている。『人天眼目』「曹洞宗」の序文には、次  
のように記されている。

洞山和尚。師ノ諱ハ良价會稽ノ人也。俗姓ハ俞氏。得タリニ法ヲ  
於洪州雲巖ノ曇晟禪師ニ。住スニ筠州ノ洞山ニ。權ニ開ニ五  
位ヲ善接シニ三根ヲ大ニ闡ニ音ヲ廣ク弘ニ萬品ヲ横ニ抽  
寶劍ヲ。剪ニ諸見之稠林ヲ。妙叶弘通ニ截ニ萬機之穿鑿ヲ。  
晚ニ得ニ本寂禪師ヲ。深ク明ニ的旨ヲ。妙ニ唱フニ嘉猷ヲ。道  
合ヒ君臣ニ。偏正回互。由レ是ニ洞上ノ玄風播ニ於天下ニ。故ニ  
諸方ノ宗匠共ニ推尊レ之。曰ニ曹洞宗ト一耳ミ。

また、君臣五位については「明ニ有爲。無爲ニ也」と定義する。  
さらに君臣五位は、君位・臣位・臣向レ君・君視レ臣・君臣道  
合である。偏正五位・功勳五位・君臣五位・王子五位の全體  
が「五位功勳圖」に提示されている。

五位功勳圖

- 正中偏 誕生内紹 君位 向 黑白未分時。
- 偏中正 (朝生外紹) 臣位 奉 露。
- 正中來 (末生隱棲) 君視臣 功 無句有句。
- 兼中至 (化生神用) 臣向君 共功 各不相干。
- 兼中到 (内生不出) 君臣合 功功 不當頭。<sup>(11)</sup>

この全體的な圖は、『人天眼目』という資料を初見とするものであり、その原典が『人天眼目』であると推定できる。偏正五位から始まり、それぞれの五位説の種類が並列されている。要するに、君臣五位などが、偏正五位に當てはめられて、組織的に理解がなされていると思われる。この「五位功勳圖」は、數多くの相傳資料に見られていることから、中世曹洞宗の五位説解釋の基礎となつたと推測でき、非常に大事な資料と言えよう。

#### 四 覺範慧洪と五位説思想

五位説の整理とその普及に大いに影響を及ぼしたのは、北宋末の臨濟宗黃龍派の覺範慧洪（一〇七一—一一二八）である。覺範慧洪は『寶鏡三昧歌』の傳承に大きく貢獻し、五位説の教學と密接な關係にあると言えよう。『禪林僧寶傳』（三十卷）、『寂音尊者智證傳』（十卷）、『林間錄』（二卷）、『石門字禪』（三十卷）、『楞嚴經合論』（十卷）、『法華經合論』（七卷）、『天厨禁燔』（二卷）と、現存する著作が數多くある。本論では、五位説の解釋に關わる『禪林僧寶傳』、『林間錄』、『石門字禪』という文献を取り上げたい。

まず、『林間錄』には五位説について次のように記されて

いる。

洞山安立<sup>三</sup>五位、道<sup>二</sup>眼明<sup>一</sup>者視<sup>三</sup>其題目十五字<sup>二</sup>排布。則見<sup>二</sup>悟本老人<sup>一</sup>如曰、正中偏・偏中正・正中來・偏中至・兼中到、其也。<sup>12)</sup>

覺範禪師は五位説の名稱を擧げて、その教義が洞山のものであるが、曹山により整理されたものであると述べている。そして、同じ『林間錄』には、「昔、洞山悟本禪師立<sup>二</sup>五位<sup>一</sup>偏正以標準<sup>三</sup>大法。」と述べている。

覺範の時代には、五位説が洞山禪師と一致するものとされ、曹洞宗の標準として認められていることが分かる。當時の曹洞宗の状況について、『石門字禪』においても覺範禪師が次のように指摘する。

達磨之道六傳、而至<sup>三</sup>曹谿<sup>一</sup>。自<sup>二</sup>曹谿派<sup>一</sup>、而爲<sup>三</sup>江西・石頭二宗<sup>一</sup>。既昭<sup>二</sup>天下<sup>一</sup>、學者翕然從<sup>レ</sup>之。由<sup>二</sup>二宗<sup>一</sup>以列<sup>レ</sup>爲<sup>三</sup>五家<sup>一</sup>。于今唯、臨濟・雲門、爲特盛。洞山悟本禪師、機鋒豎亞而出、年代寢遠。借<sup>レ</sup>其無傳。<sup>13)</sup>

五家の中で、特に影響力を持ったのは臨濟と雲門である一方、洞門が勢力を失ったことが述べられている。五位説については、覺範は『林間錄』で、次のように説明する。

洞山悟本禪師作<sup>二</sup>五位君臣<sup>一</sup>標準<sup>三</sup>綱要<sup>一</sup>。又、自作<sup>レ</sup>偈。

系於其下曰、正中偏、三更初夜月明前、莫怪相逢不  
識、隱隱猶懷昔日嫌。偏中正、失曉老婆逢古鏡、分明  
觀面更無他。休更迷頭猶認影。正中來、無中有路  
出塵埃、但能莫觸當今諱。也勝前朝斷舌才。偏中至、  
兩刃交鋒不須避、好手還同火裏蓮、宛然自有衝天  
氣。兼中到、不落有無誰敢和、人人盡欲出常流、  
折合還歸炭裏坐。臨濟、洞上二宗相須發揮大法。而  
是偈語、世俗傳寫多更易之。以徇其私、失先德之  
意、予竊惜之。今錄古本於此、正諸傳之誤。<sup>(15)</sup>  
ここには偏正五位説の名稱と共に、「洞上五位頌」が記さ  
れている。それは、「古本」によるものであるが、「古本」と  
は何本を指すか不明である。

先述のように、五位説が曹洞宗のみならず、林下にも流行  
したものであったことが知られる。その結果、五位説の受  
容が時代の流れに沿って徐々に變わっていった。『石門字禪』  
「題雲居弘覺禪師語録（一）」に收められている五位説の状況  
は次のようである。

今其道愈陵遠、至於列位之名件、亦訛亂不次。如正  
中偏、偏中正、又正中來、偏中至、然後以兼中到、總成五。  
今乃易偏中至爲兼中矣。不曉其何義耶。而老師

「天眼目」に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉（サンヴィド）

大衲、亦恬然不知怪。爲可笑也。<sup>(16)</sup>

ここで、第四位の名稱について大いに論じられている。右  
の一部を訓讀すれば、「今、乃ち偏中至を易えて、兼中と爲す。  
其れ何の義を曉さざるや。而して老師大衲も、亦恬然として  
怪しむを知らず。笑うべきと爲すなり。」となる。覺範の批  
判は、第四位が「偏中至」から「兼中至」に改變されたこと  
に對するものである。文獻的な検討では、「偏中至」の代わ  
りに、「兼中至」を初めに使ったのは汾陽であり、後世に大  
きな影響を與えたと考えられる。ここで、覺範は汾陽の五位  
説視點を非難しているわけではなく、同じ『林間録』には、  
汾陽が高く評價されていることが見られる。

汾州無德禪師、示徒多談洞山五位・臨濟三玄。至作  
廣智歌明十五家宗風。<sup>(17)</sup>

覺範は第四位の「兼中至」という名稱が普及したことを批  
判する。それは正統的な解釋ではないからである。それにも  
拘わらず、第四位「兼中至」の名稱を初めて使った汾陽を非  
難することなく、『石門文字禪』には「眞是汾州五世孫」と  
記されている。すなわち、覺範自らが汾陽の第五世孫である  
と明白に指摘しているのである。覺範の目的は五位説の正誤  
について論じることであるが、屬している一派の正統性を支

える根據が失われないように、汾陽の五位説を批判對象としていないことが明白である。

五位説の禪學において基礎的文獻として位置づけられる『人天眼目』には覺範からの引用が見られる。五位説についての引用は「曹山五位君臣」がある。

僧問曹山五位君臣旨訣。山曰、正位、即屬空界。本來無物偏位、即色界。有萬形象、偏中至者、捨事入理。正中來者、背理就事、兼帶者、冥應衆緣。不隨諸有、非染、非淨、非正、非偏。故曰、虛玄、大道無著真宗。從上先德、推此一位、最妙最玄。要當審詳辨明、君爲正位。臣爲偏位。臣向君、是偏中正。君視臣、是正中偏。君臣道合。是兼帶語。問、如何是君。曰、妙德尊、寰宇、高明朗、太虛。如何是臣。曰、靈機宏、聖道、眞智利、群生。問、如何是臣向君。曰、不墮諸異趣、凝情望聖容。問、如何是君視臣。曰、妙容雖不、光燭不無、偏。問、如何是君臣道合。曰、混然無內外、和融上下。又曰、以君臣偏正一、言者、不欲犯中。

右に引いた記述は、『禪林僧法傳』ではほぼ同じ内容とな

っている。

僧問五位君臣旨訣。章曰、正位即空界、本來無物。偏位即色界、有萬形象。偏中至者、捨事入理。正中來者、背理就事。兼帶者、冥應衆緣、不隨諸有、非染、非淨、非正、非偏。故曰、虛玄大道、無著眞宗。從上先德、推此一位、最妙最玄。要當審詳辨明、君爲正位。臣是偏位。臣向君是偏中正。君視臣是正中偏。君臣道合、是兼帶語。問、如何是君。曰、妙德尊寰宇。高明朗太虛。問、如何是臣。曰、靈機宏聖道、眞智利群生。問、如何是臣向君。曰、不墮諸異趣、凝情望聖容。問、如何是君視臣。曰、妙容雖不、光燭不無、偏。問、如何是君臣道合。曰、混然無內外、和融上下。又曰、以君臣偏正一、言者、不欲犯中。

更に、『石門文字禪』では、第四位の名稱について、次のように説かれている。

其道愈陵遲。至於列位之名件。亦訛亂不次。如正中偏、偏中正、又、正中來、偏中至。然後以兼中到、總成五位。今乃、易偏中至爲兼中至。不曉其義一耶。而老師大衲、亦恬然不知怪。爲可笑也。

覺範は五位傳授については、宗派を問わず影響を及ぼした

が、後人により非難された例が数多くあり、覺範に對する評價が厳しくなつた。覺範の五位については数多くの問題點が擧げられるが、第一としては、第四位「偏中至」である。文献的には「偏中至」という名稱が正統的な呼び方であると指摘した資料は存在しないから、何を根據に覺範が正誤を指摘したか不明確であるという批判がなされた。また、覺範の五位説注が『人天眼目』に收められているので、日本曹洞宗の五位説受容にとって不可欠なものといえよう。

## 五 『人天眼目』について

『人天眼目』という資料は南宋の淳熙十五年（一一八八）に、天台山萬年寺において、晩年の晦巖智昭によつて編纂されたものであることが知られている。彼は、禪門五家の機關・綱要を數年にわたつて収集し、手を加えずにそれを完成したのである。本書の内容は、臨濟・雲門・曹洞・潯仰・法眼という順に従い、宗派に分類し、各派の宗祖とその祖師の傳あるいは語句の重要箇所を擧げている。

『人天眼目』の序には、その原典についての記述が見られる。余初游方所<sup>レ</sup>至盡<sup>レ</sup>誠、咨<sup>レ</sup>扣<sup>レ</sup>尊<sup>レ</sup>宿五宗綱要。其間件目、往往不同亦有<sup>レ</sup>所未<sup>レ</sup>知者。因而慨念。既據<sup>レ</sup>師位<sup>レ</sup>而綱

『人天眼目』に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉（サンヴィド）

宗語句、尙不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>其名。況旨訣乎。將何以啟迪<sup>レ</sup>後昆、別抉<sup>レ</sup>疑膜<sup>レ</sup>邪。於是有<sup>レ</sup>意於綱要。幾二十年矣。或見<sup>レ</sup>於遺編、或得<sup>レ</sup>於斷碣、或聞<sup>レ</sup>尊宿稱提、或獲<sup>レ</sup>老衲垂頌。凡是五宗綱要者、卽筆而藏<sup>レ</sup>諸。雖<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>巨軸、第未<sup>レ</sup>暇<sup>レ</sup>詳定。晚抵天台萬年山寺、始償<sup>レ</sup>其志。編次類列、分爲<sup>レ</sup>五宗。名<sup>レ</sup>之曰<sup>レ</sup>人天眼目。其辭皆一、依<sup>レ</sup>前輩所作。弗<sup>レ</sup>敢增損。然是集也。乃從上諸大老利物施爲。既非<sup>レ</sup>予胸臆之論。俾行<sup>レ</sup>於世。有<sup>レ</sup>何諄<sup>レ</sup>焉。若其執<sup>レ</sup>拂柄<sup>レ</sup>據<sup>レ</sup>師位<sup>レ</sup>者、捨<sup>レ</sup>是則無以辯驗<sup>レ</sup>邪正<sup>レ</sup>也。有識博聞者、必垂<sup>レ</sup>印<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>。

これによれば、晦巖智昭は行脚僧であり、數年にわたつて諸國の師に參じて、五家（臨濟・雲門・曹洞・潯仰・法眼）の綱要を取得したことが知られる。晩年には、天台山萬年寺に至つて、五宗の綱要を記録したものを編纂することができた。『人天眼目』を編集した意圖について、椎名氏は次のように述べる。

「略」かならずしも學人が五家の機關や綱要を參究するための資助とすることにあつたのではなく、むしろ、それを指導する宗師家の側に依用されることを目ざす嚴しいものであつた。

要するに、從來、『人天眼目』は初心者のための資料ではなく、むしろ、指導する師を對象としたのである。本書の内容は、名稱の如く、人天の師たるべき禪門の者が、自らの力量を辨驗し、印可の規範とする眼目とするところにある。

さて、時間の流れに沿って、『人天眼目』の性格が變遷したことは、周知の事實である。特に、中世日本において、本書は多々刊行され、流布した。その流行とともに、本書の對象も變わり、學人たちが五家の機關・綱要を得る知識のためのテキストとなったので、日本中世曹洞宗においては、資料的に極めて貴重な本である。

今日一般的に用いられている『人天眼目』は、大正藏經四十八卷に收められている。それは江戸初期、承應三年版を底本とする。それ以外にも、異本が數多くあり、五山版も挙げられる。

五山版は鎌倉末期の乾元二年（一三〇二）に始まり、現在、天理大學附屬天理圖書館所藏本がある。それは最古の貴重な資料となっている。本論文の資料としてこの書物を参照したい。また、朝鮮半島においても、『人天眼目』の數多くの版本が刊行され、その中には、高麗版『人天眼目』がある。その内容は他の異本と異なるので、大變興味深い資料と言へる。

『人天眼目』卷三は、曹洞宗についての記述がその中心となり、代表的な教説としては五位説が示されている。五位説については、五位君臣・五位頌・洞山功勳五位・曹山五位君臣圖・五位功勳圖という順に従い、提示されている。これは、五位に關わる門參・切紙あるいは一般に中世時代の五位知識の基盤となり、不可欠な資料であることが分かる。しかし、『人天眼目』とそれに説かれている教義は、曹洞宗の教團にとどまらず、臨濟のグループでも、大いに注目を集めることになった。

## 六 日本における『人天眼目』と道元禪師の批判

日本曹洞宗の五位説展開を見る上で、大事な資料として、『正法眼藏』が挙げられ、多くの卷で、五位説とそれに關わる資料批判がなされている。したがって、道元禪師の時代より流行した教義であったと推測できる。例えば、「春秋」卷では五位説について次のように述べている。

しかるに、箇箇おほくあやまりて、偏正の窟宅にして高祖洞山大師を禮拜せんとすることを焔誠するなり、佛法もし偏正の局量より相傳せば、いかで今日にいたらん。

あるひは野猫兒、あるいひは田庫奴、いまだ洞山の堂奥

を参究せず、かつて佛法の道閫を行李せざるともがら、あやまりて洞山に偏正等の五位ありて人を接す、といふ。これは胡説亂説なり、見聞すべからず。ただまさに上祖の正法眼藏あることを参究すべし。

道元は洞山の五位説を厳しく批判するとともに、「偏正の局量」という表現を使つて機關禪を否定しているわけである。要するに、「春秋」における道元の批判的言及は五位説に限定するものではなく、修行者育成のために機關を用いるというのも批判の対象となつていゝと言えよう。その「春秋」の語より推測すると、道元禪師が當時一般に浸透した偏正五位を機關的性格として否定してゐたと思われる。但し、道元禪師が具體的にどのような五位説を論じてゐるのかは明確ではないが、偏正五位のみがその批判の対象であると言ひ難い。松田氏により「道元禪師によつて對象化される當時の五位説及び用いる傾向は、否定的に取り扱われるべき性格のものであつて、それ以外のいわば禪師にとつて正しい五位やその解釋がそれ以前に存在してゐたとは考えにくい」という見解が示されてゐる。

また、『正法眼藏』、『佛道』には、『人天眼目』の流布についても記されてゐる。

雲箇水箇、眞箇の参究を求覓せんは、切忌すらくは、五家の亂稱を記持することなかれ、五家の門風を記號することなかれ。五家の門風を記號することなかれ。いはんや三玄・三要、四料箇・四照用、九帶等あらんや。いはんや三句・五位・十同眞智あらんや。

#### 〔中略〕

後來智聰といふ小兒子ありて、祖師の一道兩道をひろひあつめて、五家の宗派といひ、人天眼目となづく。人これをわきまえず、初心晩學のやから、まこととおもひて、衣領にかくしもてるもあり。人天眼目にあらず、人天の眼目をくらますなり。かの「人天の眼目」は、智聰上座、淳熙戊申十二月のころ、天台山萬年寺にして編集せり。後來の所作なりとも、道是あらば聽許すべし。これは狂亂なり、愚暗なり。參學眼なし、行脚眼なし、いはんや見佛祖眼あらんや。もちあるべからず。智聰といふふべからず、愚蒙といふべし。その人をしらず、人にあはざるが言句をあつめて、その人とある人の言句をひろはず。しりぬ、人をしらずといふことを。

道元禪師は、『人天眼目』が學人の修行の基盤となつたことを厳しく批判した。その主張の中には、道元が好んだ言葉

『人天眼目』に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉（サンヴィド）

遊びが見られ、『人天眼目』の著作である晦巖智聰を「愚蒙」という皮肉的な言葉を用いて呼んでいる。

### 七 『人天眼目』とその抄物 — 『人天眼目抄』

中世曹洞宗の特色として、抄物の流布が擧げられる。抄物という資料は、中世時代の「智の循環」の理解のために、重要なものである。一般に、抄物の内容は、道元禪師の「純禪」から離れていて、非正統的な傾向を表わすものであるため、中世禪宗の形態理解には特に興味深い資料と言えよう。五位説の流行には、『人天眼目』に關わる抄物が大事であり、それは『人天眼目抄』と名付けられ、五位傳授の状態とその二ユアンスを反映した資料となっている。

『人天眼目抄』は、曹洞宗峨山派太原派下、遠江一雲齋の住僧川僧慧濟（一四七五）による、文明年間における、『人天眼目』の講義の聞書で、東國語の最古の資料であり、最初に國語學の見地から注目を集めたものである。最近の研究では、石川氏を始めとし、五位説の構造に併せて、本書の影響が宗教的な面でも再考察された。

『人天眼目抄』は「聞書抄」であり、それは講義者の言葉を聽講者が筆記した書物である。しかしながら、室町時代末

期より江戸時代初期にかけて、それ以前に成立した抄物を基盤として、多くの整合的な文獻が成立したので、聞書抄の特殊性が失われることもあった。<sup>27)</sup> 今日、『人天眼目抄』には三種の諸本が知られる。それらは松ヶ丘文庫本・東京大學史料編纂所本・足利學校遺跡圖書館藏本である。松ヶ丘文庫本は他本より簡略に記され「手控えノートの性格」<sup>28)</sup>があるとされる。東京大學史料編纂所本は文明三年から五年に至る間に成立した書物であり、その第一・三・八目の卷末には大徳寺の春浦宗熙の名が記録されている。石川氏は、次のように説明する。

編纂所本は春浦が川僧の『人天眼目』の講義に注目し、その聞き書きを入手してこれに少量を施したものと推定され、編纂所本に見られる文明三年から五年に至る間のすべての年時日付の記録は、川僧の講義の直後に春浦が商量を加えた年時を意味するもので、結論として、編纂所本は川僧の抄の講本に春浦が商量を加えたものがその原本であったと推定される。<sup>29)</sup>

要するに、編纂所本は川僧による『人天眼目』についての講義の聞き書きであり、それに春浦が考察を加えた本である。編纂所本は曹洞宗の内説で成立したものであるとされ、石川

氏によれば、大徳寺派の春浦が入手し、本書に林下の影響も及んだことが推測できる。その他、峨山派太原派下の『人天眼目抄』の影響を受けた長興寺所藏『人天眼目抄』もあり、それは通幻派天眞派の抄物として位置づけられる。

『人天眼目抄』の著作は川僧慧濟であるが、その法系は、太原―梅山―閻本―如仲天閻―眞巖道空―川僧慧濟と嗣承したことが知られる。太原派は、遠江・駿河・三河地方において展開を遂げたが、その展開に貢献した人物は、如仲天閻であつたと推察される。

本稿では、東京大學史料編纂所本・足利學校本を参照しながら、最古の註釋抄である『人天眼目批卻集』との比較も行いたい。大東急記念文庫藏『人天眼目批卻集』（二三三三）は、『人天眼目』の最も古い註釋書であり、後世の『人天眼目抄』に影響を與え、川僧慧濟『人天眼目抄』と同様の内容が含まれていることが推測できる。『人天眼目批卻集』を書寫した筆者は、臨濟宗聖一派の竹庵大縁である。その竹庵大縁は東福寺百十四世であり、また、建仁寺、南禪寺にも歴住したことが知られている。東福寺を開山したのは聖一國師圓爾であり、圓爾は天台あるいは密教の諸宗を整理した兼修禪を公家の間にも広めさせ、禪宗の展開に大事な役割を果たした人物である。

『人天眼目』に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉（サンヴィド）

『人天眼目批卻集』の序には、本書の目的が次のように示されている。

「前略」洞上一宗、有舛訛尤甚也。豈非世路以多岐亡羊、學者以多途喪志乎途喪志乎哉。聿己而不能、至於五位君臣、與三種墮、自覺頗稱乎古來之美焉。雖然呈孟浪解、亦望千萬之一有裨於祖教、所謂涓滴足海、予之志也。<sup>③</sup>

この文の著者は、曹洞宗における誤りを正そうという目標に従ってそれを記している。その序文には、道元禪師の批判にも拘わらず、十四世紀から、道元の法流の間に、五位説が流行し、それと共に、様々な解釋が成立したことが見られる。臨濟五山の僧であることから、中國と同じく日本にも五位説はそれぞれの門派に廣まり、更にその時代の「智の循環」あるいは異なる宗派の相互交渉の根據として位置付けられていたことが分かる。

本稿には、東京編纂所『人天眼目抄』と足利學校『人天眼目抄』における『人天眼目批卻集』の引用を紹介したい。

まず、洞山功勳の「向」のところに、『人天眼目抄』では次のように説かれている。

編纂所本

洞山功勳五位頌 向

向。聖主由來法ノツトル帝堯ニ。

師云、道ヲチヲタ、ス聖主ワ、帝堯虞舜ヲ爲スレ本ト。日本テワ、

延喜・天曆。

御キヨスルニ人以レメ禮曲ニ龍腰ヲ。

御スルト云ワ、人ヲ使ツカフナリ。王ト云テ、紫震殿ニウツツ

ツテワ居イヌソ。有僧說破ニ、王令嚴也ト云ニ、ソレハ道

チガウソ。堯舜垂レ衣萬國賓トコソ、道イタレ。曲龍腰、

チツトモ己オノレヲ不ス存セ、己ヲ不存兒ヲタソ。曲龍腰、三四

ノ句ハ、喫飯時作レ廢生ト云機ヲソ。

有ル時鬧市頭邊ニ過レハ、

己カナケレハ、ドツコモ己ノレヨ。批却ニ引ニ論語一、君子

無ニ終シ終食之間ヒマヲモタカフ違レ仁。造次ニ必於是、顛沛ニ必於是。

師云、喫飯内チモ、チツトモ間斷ナイソ。撈云、到處文明

賀ス聖朝ヲ、以什麼爲驗。代云、普天ノ下無レ不スト云ニ王

土ニ。

足利學校本

洞山功勳五位頌 〈向〉

聖主由來法帝堯、御人以禮曲龍腰。

只今ノ聖主、唐堯ノ如ク。天下ヲ治メ、人ヲ使ウニモ、

禮ヲ正メ、腰ヲカガメテ、身ヲモタテス、己ヲ存セヌ程

ニ、ドコモ己タソ。

鬧市頭邊ニモ存ゾ。此カ喫飯時作廢生、ト云タゾ。鬧市

門頭ノ、鬧々ト忙シイ中ニモ、チツトモ離レズ、向ウ

タゾ。

サテコソ、到處ニ賀スト云タレ。ドコモ聖朝タゾ。

批判ニ、需書ヲ引タゾ。君子無終食之間不違仁、造次必

於此、顛沛必於此。ドコデモ向タゾ。

内容の面では、兩本の「有時鬧市頭邊邊」の句には、「批

却ニ」、あるいは「批判ニ」と記され、それは、『人天眼目批

卻集』を指していると推定できる。

『人天眼目批却集』で洞山功勳の「向」を論じているとこ

ろには、次のように見られる。

『人天眼目批卻集』

(16) 論向

□日、□如稱言言日、君子、无終食之間違仁、造□□於此、

顛沛必於□。若夫灵光獨輝、迴脱根塵、非今所用也。今

功勳所立、專在趣向。故云、聖主由來法帝堯、喻意可

見。

編纂所藏本と足利學校所藏本には微妙な違いがあるもの

の、「人天眼目批卻集」に見られる「論語」の「里仁」の引用は、



ラマサレヌソ。偏ノ中正也。正カツライソ。ドツコテモ、正カツイヨイソ。私云、兜率界テ、偏ニ行タソ。臣ノ上ヘニ、君カアルソ。摺云、未離兜率界、烏鷄雪上行、試辨白セヨ看。代云、隨レ縁赴レ感靡レ不レ周、偏而常此ノ坐スニ苦提座ニ。

◎ 語話而云、中ノ點カ、トツチヲカ、ヌソ。來ハ、チヤウト踏ツメタソ。ハタラカ又證據ニ、批却ニ、金剛經、無所從來、亦無所去、故名如來。故名如來。又批判ニ、全躰全身獨露（萬法根源也）。

足利學校本

焰裏寒氷結、楊花九月飛。泥〔牛吼水面、木馬遂風〕吼。四句共ニ、是ハ作麼ヲ云タゾ。作麼在ゾ。是作麼ト看ヨ。正中來ノ姿タゾ。全體獨露タゾ。焰裏ノ寒氷、九月ノ楊花ヲバ、誰カ見タソ。泥牛ノ吼へ、木馬嘶ルヲバ、誰聞タゾ。

『人天眼目批卻集』

曹洞宗

(8) 論五位君臣旨訣

三、金剛經云、如來者、无レ所ニ從來、亦无レ所レ去、故名ニ如來。

第三の引用として、東京大學史料編纂所藏本の曹山五位君臣ノ圖頌并序には、「批却ニ、金剛經、従り來る所もなく、亦去るところもなきが故に、如來となづく。又批判ニ、全躰全身獨露（萬法根源也）」と見られる一方で、足利學校本の同じ箇所では、引用が少し違っているところがあり、そこに、「全體獨露タゾ」と書かれているのに、批判からの引用であると表現していない。編纂所藏本の『金剛經』からの引用は「人天眼目批卻集」の「曹洞宗 序」にあり、同じである。しかし、同じ編纂所藏本の「全躰全身獨露（萬法根源也）」は「人天眼目批卻集」にはそのままでは見られないのであるが、君臣五位の「四論共功」のところには、「故曰、法界は、一切衆生、身心の本躰也」と記されているのは、内容的な見地からは似ているように思われる。

最後に、編纂所藏本の五位功勳圖だけに論じられる「批却ニモ、皆ナ置チカヘタト批判ス也」という表現については、引用というより『人天眼目批卻集』の内容について述べているものである。要するに、君子五位・功勳五位・王子五位が混亂された結果、多くの人がその邪道に落ちてしまったことが示されている。

編纂所本

五位功勳圖

向ハ、正偏相對向クル也。

正中偏（誕生・内紹）。君。位。向。黑白未分時。

抄、嫡子也。儲君也。私云、儲君ハ、内紹、日本テ、マ

ウケノ君也。東宮、東殿ナント、云也。王位ヲ紹ス

ル王子也。師話話メ云、批却ニモ、皆ナ置チカヘタト批

判ス也。

『人天眼目批卻集』

論功勳五位圖僞

鍛鍊於學者、漚和之門耳。至彼君臣失據、功勳不興、遂

令誕生王子、寄跡乎正中偏之中菴、垢衣權容、攝位于兼

中到之寶域、豈非左道之至哉。

中世曹洞宗の五位説の構成には『人天眼目批卻集』の役割が非常に大事であつたことは明瞭であり、しかもその影響は無論、『人天眼目抄』という文献にとどまらず、他の資料にも及んだことが確認できる。『人天眼目抄』の著者は川僧慧濟という人物であり、峨山派に属していたことが知られている。峨山派を開いた峨山韶禪師と、その諸々の「二十五哲」という門弟が中世時代における曹洞宗の地方的展開に大きな

『人天眼目』に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉（サンヴィド）

役割を果たしたことは周知の事實である。また、石川氏により、峨山禪師は五位説授用の嚆矢となつたことが述べられていることから、五位説の傳授を流行させたのは峨山禪師とその弟子であつたことが理解できる。六地藏寺所藏の『一花開五葉』という資料には、「峨山和尚人天眼目代」という内題が見られるように、『人天眼目』を基盤とした代語抄である。「曹洞宗」・「功勳五位」の段の第一位「向」の箇所では、次の通り記されている。

功勳五位。向。造<sup>サウシテ</sup>次顛<sup>テ</sup>沛<sup>イ</sup>只是。奉。慇<sup>イ</sup>懃<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>米<sup>イ</sup>飯<sup>イ</sup>、

堂前<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>問<sup>シ</sup>親<sup>ヲ</sup>。共<sup>功</sup>。此理若了全<sup>ク</sup>无<sup>シ</sup>事、體用何妨<sup>シ</sup>分與

不分。共功。光境具<sup>ニ</sup>亡<sup>ス</sup>其<sup>レ</sup>何<sup>ニ</sup>物<sup>ソ</sup>。功々。佛祖未生空

劫已前、徧正會<sup>テ</sup>不<sup>ス</sup>墮<sup>セ</sup>有<sup>レ</sup>无<sup>レ</sup>機<sup>也</sup>。

それは、『論語』「里仁」に見られる言葉であり、編纂所本と足利學校本によれば、『人天眼目批卻集』の同じ「功勳五位」第一位「向」の段に、その引用が見られる。したがって、峨山禪師とその門派が『人天眼目批卻集』を學んで、五位説の參學とその傳授に大事な位置付けを持っていた資料であると推測できるであろう。その一方、峨山禪師の五位説理解と『人天眼目批卻集』には異なっている點も多くあるので、それらについては、今後の研究課題としたい。

## 八 臨濟宗における『人天眼目』の批判

『人天眼目批卻集』は『人天眼目抄』の成立に大きな影響を與えた文献である。加えて、『人天眼目批卻集』は臨濟宗の『人天眼目』と五位説についての理解も表わした本である。

洞山□□□神、設偏正五位、正爲救此个之弊而已。然古人違於此、而妄作用之説、不令洞深旨、見于後昆。悲夫是體用之説、讓君臣五位、不是偏正五位之譚焉。明安曰、正中來乃奇特受用、即主中主、爲什麼翻去、主中主、物我雙亡、人法俱泯、不涉正偏位（安難）。又明安云、兼中至、乃非有非無、即實中實、緣底還云、體用□至、（安難）。若實中實、用中用、頭上安頭、此ケ説亦爲體用位至反（自語）。又汝體用説中、不得接正中來（除一位難）、當知門庭説、不能遊□者耶。予按洞山宗風、孟子有言曰、孔子之謂集大成、集大成也者、金聲而玉□（振之）也。金聲也者、始條理也。玉振也者、終條理也。

始條理者、智之叟也者、洞山□請坎。是故洞山一宗、奇巧精密、最與他宗異。是以觀施設之終始、件々竝哀末法乾慧之弊。故是辭苦口丁寧、動開階位焉。古有不違教之説、稍窺門庭。然洞山室中、猶嫌本來面目、而云顛倒行

事、矧以偏正五位、乃至三種滲漏、蔽洞山宗風。譬如求馬于唐肆、无乃不悞哉。

著者は曹洞の「四賓主」と「五位説」を比較した上で、五位説の理解について論じている。その結論として、『人天眼目』には「五位説」が方便として理解されることなく、むしろ「偏正」が洞山禪師の教義をそのままに表したものであると示されている。要するに、『人天眼目』に説かれている五位説は誤解であると厳しく批判しているのである。『人天眼目批卻集』に見られる批判は、道元禪師の論じた『人天眼目』についての内容と、大きく異ならず、そこで『人天眼目』という本は、淺薄な解釋を示すものとして批判された。

臨濟宗における五位説の受容は、『人天眼目批卻集』にとどまらず、他の林下に關わる資料にも確認できる。無論、曹洞宗と違つて『人天眼目』は臨濟宗に重視されていなかったが、中世によく流布した本であつたと考えられる。したがつて、林下の語録では、五位説について論じているのであり、一例を挙げれば、『大燈國師語録』には、次のような記述が見られる。

乃云、徧界不<sub>レ</sub>曾<sub>レ</sub>藏處、方是時人、難<sub>二</sub>躡避<sub>一</sub>時節、恰似半夜、放<sub>二</sub>鳥鷄<sub>一</sub>、左之右之、向<sub>二</sub>甚處<sub>一</sub>辨明。直得陰去

陽來、雪寒氷冷、吾家大用、觸處繁興、豈敢遂下洞山圖<sup>二</sup>

熱鬧一底之狂解<sup>④</sup><sub>上</sub>

大燈國師は、洞山の愚かな解釋を追いかける必要はないと説いたのであり、それが五位説の間接的な批判であるかと思われる。また、林下大徳寺派の『大徳寺夜話』（室町時代中期）には、次のように説かれている。

（102）一、開山ハ、人天眼目、人天盲目テコソアレ、ト仰ラレテ不御覽。又、傳燈録ハ、目クラ僧多載タ、ト仰ラレテ御嫌アリ、談義ナトハセストモ、ト仰ラレタ。大照禪師モ、如此仰ラレタ也<sup>⑤</sup>。

『大徳寺夜話』には、「開山」つまり大燈國師の『人天眼目』についての批判が確認でき、「人天盲目」と改稱されている。しかし、その理由などが明白されていないので、何の根據に基づいて判断されたか推定し難い。それにも拘わらず、『大徳寺夜話』には『人天眼目批卻集』と同じく、中世時代の禪理解を根據とした『人天眼目』の流布を強く批判している記述が見られる。

## 九 おわりに

本稿は、『人天眼目』と、それに關わる抄物における臨濟

『人天眼目』に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉（サンヴィド）

宗と曹洞宗の相互關係あるいは、對立性という意識について論述したものである。その手始めとして、五位説の基盤資料とした峨山派の川僧慧濟『人天眼目抄』と、『人天眼目』の最古注釋書である『人天眼目批卻集』とを檢討した。

『人天眼目批卻集』の著者は、聖一派の竹庵大縁であり、中世時代の臨濟宗の間にも、『人天眼目』が普及した資料であつたことが推定できる。また、『人天眼目抄』と比較することで、『人天眼目批卻集』は、五位説の理解に大いに影響を及ぼした資料であることが推察された。

一方、『人天眼目批卻集』と『人天眼目抄』には異なつた説も多く見られ、その視點によれば、當時の臨濟宗と曹洞宗の交渉あるいは兩派の間の「智の循環」が推定できる。この「智の循環」とは、當時の佛教世界と社會において傳播された知識の交流を指し、五位説と『人天眼目』の抄物がそれぞれの宗派に廣がつたことで、中世時代の「智の循環」の一部となつたことが考えられる。

『人天眼目批卻集』では、『人天眼目』にある五位説の解釋は、洞山禪師の教説であり、方便あるいは徹底的な方法として捉えられていないと批判している。その批判は、『人天眼目』を根據とした曹洞宗の五位説理解を否定しているのでは

ないかと考えられる。しかし、川僧慧濟の世代より、『人天眼目』の抄物が同時に兩派の中に成立し、そのことは東京大學史料編纂所本の第一・三・八目の卷末に大徳寺の春浦宗熙の名が記録されていることから確認できる。編纂所本では、『人天眼目』への批判が薄らいだが、そのことは曹洞宗の地域的展開、加えてその勢力の擴充、更には臨濟宗との交流の結果であるかと思われる。つまり、『人天眼目』とその抄物における五位説の解釋が當時の曹洞宗と臨濟宗に共通する知識であったことに併せて、また兩宗の相互交渉のみならず、それぞれの正統性の確保をも傳へ示す資料であることが推定される。

註

- (1) 石川力山『禪宗相傳資料の研究』上(法藏館、二〇〇一年)一九五頁。
- (2) 玉村竹二「日本中世禪林に於ける臨濟・曹洞兩宗の異同上―「林下」の問題について」(『史學雜誌』五九・七、一九五〇年)参照。
- (3) 新纂續藏六三・一九八頁下。
- (4) 大正五〇・七八六頁中。
- (5) 石井修道「曹山本寂の五位説の創唱をめぐって」(『宗學研究』二八、一九八六年)一九二頁。
- (6) 椎名宏雄『五山版中國禪籍叢刊』卷五(京都・臨川書店、二〇一六年)二三一頁。
- (7) 新纂續藏六三・二〇五頁下。
- (8) 石井(前掲)、一九三頁。
- (9) 椎名(前掲)、一三一頁。
- (10) 椎名(前掲)、一三〇頁。
- (11) 椎名(前掲)、一三五頁。
- (12) 新纂續藏八七・二五三頁上。
- (13) 新纂續藏八七・二五八頁上。
- (14) 嘉興大藏經二三・六九〇頁上。
- (15) 新纂續藏八七・二七四頁下。
- (16) 嘉興大藏經二三卷・七〇一頁中。
- (17) 新纂續藏八七・二七〇頁中。
- (18) 椎名(前掲)、一三三頁。
- (19) 新纂續藏七九・四九三頁下。
- (20) 嘉興大藏經二三卷・七〇一頁中。
- (21) 椎名(前掲)、一〇三頁。
- (22) 椎名宏雄、「高麗版『人天眼目』とその資料」(駒澤大學佛教學部研究紀要)四四、一九八六年)参照。
- (23) 『正法眼藏』「春秋」(『曹洞宗全書』「宗源上」一三二頁)。
- (24) 松田陽志「五位説と道元禪師―五位文獻に見る道元禪師の

五位説批判」(『道元禪師研究論集』、大本山永平寺・大修館書店、二〇〇二年)二九七頁。

(25) 松田(前掲)、二九八頁。

(26) 『正法眼藏』佛道(『曹洞宗全書』宗源上)四五―五〇頁。

(27) 飯塚大展「中世曹洞宗における『人天眼目』の受容について―『人天眼目』僧抄を中心として」(『曹洞宗研究員研究紀要』二七、一九九六年) 參照。

(28) 石川力山「人天眼目抄について」(『印度學佛教學研究』二六、一九七八年) 七八―一頁。

(29) 石川(註(1) 所掲)、七八〇頁。

(30) 飯塚(前掲)、參照。

(31) 飯塚(前掲)、參照。

(32) 中田祝夫・外山映次『人天眼目抄』 勉誠社、一九七五年、三九〇頁。

(33) 中田・外山(前掲)、二九頁。

(34) 飯塚(前掲)、九五頁。

(35) 中田・外山(前掲)、三九二頁。

(36) 中田・外山(前掲)、三〇頁。

(37) 飯塚(前掲)、九六頁。

(38) 元龜二年本、冊二、京都大學附屬圖書館

(<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/060/060cont.htm>)。

(39) 中田・外山(前掲)、三九四頁。

(40) 中田・外山(前掲)、三三三頁。

『人天眼目』に關わる抄物の曹洞宗と臨濟宗における相互交渉(サンワイド)

(41) 飯塚(前掲)、九一頁。

(42) 中田・外山(前掲)、四〇〇頁。

(43) 飯塚(前掲)、九七頁。

(44) 飯塚(前掲)、一二〇頁。

(45) 飯塚(前掲)、一〇〇頁。

(46) 平野宗淨、『大燈國師語錄原本影印』(思文閣出版、一九八六年) 九八頁。

(47) 飯塚大展、「龍谷大學圖書館藏『大德寺夜話』をめぐって(一) 資料編」(『駒澤大學禪研究所年報』一〇、一九九九年) 一一九頁。

〈キーワード〉曹洞宗、臨濟宗、抄物、人天眼目、五位説